

二〇二二年二月二日

ふた指に香りを移し木の芽摘む
倒木を越えて流るる春の水
手をとりにて老々介護日脚伸ぶ
色失せてときに激しき風ぐるま
歛休む春田の空に鳶かな
児の描きし鬼の目やさし節分会

董雨
豊実
やよい
せいじ
凡士
なつき

二〇二二年二月一日

新婚の趣味はマラソン風光る
雛段に金の折鶴羽広ぐ
春節の南京町に赤溢れ
虚無僧の渡る吊り橋山笑ふ
春水を力水とし鎌を研ぐ
春眠に落ちたる吾子の手にゴジラ
突然に子等のかけつこ春の坂
歳時記を開きしままの春炬燵

こすもす
なつき
宏虎
智恵子
みきお
そうけい
あひる
みきお

二〇二二年二月一日

モアイ像めきて白菜残る畝
山頂は消えるに任す山火かな
黒変す老幹の枝に梅白し
逃げ惑ふ追儼の鬼のばけつ蹴る
竹干さる茶釜の里や春うらら
春づつみ写生の児らの散らばりぬ
生きてをるぞと芽を吹きし古木かな
芽柳やコロナ無聊の温泉街

あひる
邑
満天
なつき
あられ
みづき
明日香
こすもす

二〇二二年二月九日

撫牛のひかるおでこに春兆す
恋の絵馬学問の絵馬東風に揺れ

たか子
宏虎

菜の花の風心地よき浄土寺

ぼんこ

塩田の名残の浜や揚雲雀

素秀

二つ三つ梅を見つけて歩の軽し

なつき

春立つといへど山家の昼ともし

凡士

二〇二二年二月八日

彩窓のキリストに射す春陽かな
少しだけ春風入るる画廊かな
強風と戦つてをる野焼勢子
ロゼットの葉の膨らみて土匂ふ
あるなしの風に震ゑて梅の花
梅東風に幣ひるがえる朱の鳥居

あひる
凡士
素秀
むべ
菜々
たか子

二〇二二年二月七日

鶴鴿の叩く瀬石に風光る
針箱の妻の旧姓針供養
下萌に積む牧場の薫ぼつち
足捌き軽くなりたる春コート
貝母の芽確かこの辺目を凝らす
つり橋に続く坂道落藪

満天
素秀
智恵子
もとこ
明日香
みきお

二〇二二年二月六日

門前の菓子屋に揃ふ春の色
子が数へあぐねる爺の年の豆
春の雪積みて回るや花時計
春日燦急に畑がにぎやかに
ワイパーの一掻きに散る薄氷

せいじ
なつき
智恵子
明日香
隆松

毎日句会みのる選・二〇二二年二月一四日